

明治時代の知識人と足尾鉍毒事件：「近代性」問題への思想史的接近

著者	商 兆?
学位授与年月日	2016-05-19
URL	http://doi.org/10.15083/00075122

博士論文（要約）

論文題目 明治時代の知識人と足尾鉍毒事件
— 「近代性」問題への思想史的接近

氏名 商 兆琦

目次

序章 本稿の課題と構造	1
一. 問題意識の設定	1
二. 方法としての「日本」	3
三. 先行研究とその問題点	5
四. 構想と方法論	8
第1部 田中正造研究	13
第一章 「生き返らせる」田中正造研究	14
はじめに	14
一. 木下尚江の田中正造論	14
二. 「生き返らせる」田中正造研究	17
三. 田中正造の位置づけ	19
四. 脱「田中中心」は？	22
第二章 「正造研究」以前の正造像	24
はじめに	24
一. 同時代人の正造像	24
1. 正造の「多様な顔」	24
2. 『義人全集』に見える正造像	25
3. 民権運動期の正造像	29
4. 「奇言奇行」の国会議員	31
5. 鳥谷部春汀の正造論	34
二. 正造自身の正造論	36
三. 正造の諸傾向	39
1. 精神面と道德感	40
2. 「激越」の性格と「奇行」	40
3. 外内の差	41
おわりに	42

第三章. 田中正造と下野	43
はじめに	43
一. 「予は下野の百姓なり」	43
二. 僮服—「母疲子肥」論	46
三. 豪農との無縁?	49
四. 正造の経済状況	51
五. 正造の社会的ネットワーク	55
おわりに	63
第四章 田中正造の「無学」をめぐる一考察—その思想像の一側面	64
はじめに	64
一. 「無学」の意識構造	64
1. 正造の「無学」	64
2. 社会の「大学校」	65
3. 無学の意識構造	67
二. 正造の勉強と教師経験	68
三. 儒学の環境	71
1. 赤尾小四郎について	71
2. 中心学問の存在	73
3. 正造と熊沢蕃山	74
四. 正造にとっての学問	75
1. 格物致知	75
2. 君子不器と知行合一	76
3. 聖人の門に入る	77
五. 正造の思想世界	80
1. 自由民権とキリスト教	81
2. 道徳と政治	84
3. 文明観	86
おわりに	89
第2部 明治知識人研究	90
第五章 「情」と「智」の相剋：勝海舟と福沢諭吉	91

一. 生い立ちと人物像	91
1. 政治家の勝と学者の福沢	91
2. 勝の「非凡」と福沢の「世俗」	94
二. 二人の鉉毒論	97
三. 勝海舟における政治的思考	104
1. 「理屈は死んでいる」	104
2. 「知行合一」と「正心誠意」	105
3. 民心の収攬	109
四. 福沢諭吉の文明論	111
1. 「古習の惑溺を一掃して」	111
2. 「人情を割くの利器は唯一片の道理なる」	115
3. 「疑の世界に真理多し」	118
4. 「瘠せ我慢の説」における徳と情	121
小括	123
第六章 「社会」と「国家」のはざままで：島田三郎と陸羯南	130
はじめに	130
一. 島田三郎と陸羯南の一般的特徴	132
1. 生い立ちと勉学	132
2. 自己認識と使命感	135
3. 人間像	140
二. 「中立」から「反対」へ：島田三郎の鉉毒論	145
1. 中立論	145
2. 「中立」から「反対」へ	148
3. 「同情に乏しき問題」	149
三. 「福沢主義」への批判：陸羯南の鉉毒論	152
1. 「福沢主義」への非難	152
2. 国家的社会主義	153
3. 「行政上の一大恥辱」	156
四. 島田三郎の「社会改良主義」	158
1. 中正主義	158
2. 社会改良主義	161

3. 「法律果シテ頼ムニ足ル乎」	164
4. キリスト教論と社会主義論	166
五. 陸羯南の「国家社会主義」	168
1. 「西洋主義の極端に苦しめられて」	168
2. 「自由」と「平等」	169
3. 「採用は実に主要の問題なり」	171
小括	173
第七章 「近代」への反逆：内村鑑三と幸徳秋水	177
一. 有神無神論	177
二. 内村鑑三と幸徳秋水の一般的特徴	178
三. 内村鑑三の鉷毒言説	184
四. 幸徳秋水の鉷毒言説	187
五. 内村鑑三におけるイエスと日本	192
1. 亡国論	192
2. 近代人批判	195
3. 二つの“J”	197
4. カルヴァン主義	201
六. 幸徳秋水における伝統と革命	205
1. 「現時の制度組織の罪」	205
2. 公德心の再建	206
3. 社会主義と天皇制	209
4. 志士仁人への期待	213
小括	216
終章 「近代性」問題と明治知識人	219
一. 明治知識人における近代性問題	219
二. 田中正造の位相	226
三. 丸山真男の遺産	231

主要参考文献リスト

本文

博士論文本文は学位取得後 5 年以内に出版予定。

参考文献一覧（脚注に明記したもの以外含む）

使用テキスト

- 内村鑑三『内村鑑三全集』全40巻、岩波書店、1980～1983年
内村鑑三『内村鑑三信仰著作全集』全25巻、教文館、1961～1966年
勝海舟『勝海舟全集』16巻別巻2、勁草書房、1972～1982年
勝海舟『勝海舟全集』全20巻、講談社、1972～1994年
勝海舟『解難録・建言書類』『明治百年史叢書・62』原書房、1968年
勝海舟『亡友題帖・清譚と逸話』『明治百年史叢書・63』原書房、1973年
勝海舟『新訂海舟座談』岩波文庫、1983年
木下尚江『木下尚江全集』全20巻、教文館、1990～2003年
木下尚江『木下尚江著作集』全15巻、明治文献、1968～1973年
陸羯南『陸羯南全集』全10巻 みすず書房、1968～1985年
陸羯南『羯南文集』大日社、1938年
幸徳秋水『幸徳秋水全集』9巻別巻2、明治文献資料刊行会、1982年
幸徳秋水（塩田庄兵衛編）『幸徳秋水の日記と書簡』未來社、1990年
島田三郎『島田三郎全集』編集復刻増補版全7巻、龍溪書舎、1989年
島田三郎『条約改正論』博文堂出版、明治22年11月
島田三郎「文明道德相関論」『六合雑誌』68号、不二出版、1986～1988年
島田三郎「国民の気風」『名家時論・1』東京青年会、1896年
島田三郎、『輿論の法廷に訴える』毎日新聞号外、1892年1月24日
田中正造『田中正造全集』19巻別巻1、岩波書店、1977～1980年
田中正造『亡国への抗論：田中正造未発表書簡集』岩波書店、2000年
田中正造『義人全集』中外新論社、1925年
鳥谷部春汀『春汀全集』全3巻博文館、1909年
福沢諭吉『福沢諭吉全集』全22巻、岩波書店、1969～1971年
福沢諭吉『福澤全集』全10巻、國民圖書、1925～1926年
福沢諭吉『福沢諭吉選集』全14巻、岩波書店、1980～1981年

叢書

- 『明治文学全集』全100巻、筑摩書房、1965～1989年
『近代日本思想史講座』全7巻、筑摩書房、1959～1961年

『近代日本思想大系』全 36 卷、筑摩書房、1974～1978 年
『現代日本思想大系』全 33 卷、筑摩書房、1963～1966 年
『明治文化全集』全 36 卷、日本評論社、1967～1974 年
『明治史研究叢書』全 12 卷、御茶の水書房、1957～1960 年
『近代日本思想史大系』全 7 卷、有斐閣、1968～1979 年

地方史

『足利市史』
『佐野市史』
『栃木県史』

雑誌

『田中正造の世界』
『田中正造全集・月報』
『田中正造と足尾鉍毒事件研究』
『救現』

伝記

岩崎徂堂『田中正造奇行談』大学館、1902
五日会編『古河市兵衛翁伝』、『翁の直話』五日会、1926 年
五日会編『古河潤吉君伝』五日会、1926 年
木戸照陽編『日本帝国国会議員正伝』田中宋栄堂、1890 年
久貝源一『国会議員評判記』言行館、1901 年
久我懋正『現行民権家品行録』秩山堂、1882 年
坂本箕山『現代名士人格と修養』帝国文学通信社、1920 年
薄田貞敬『昆田文次郎君の生涯』後昆会、1929 年
中野元実編『衆議院十奇人』中野元実、1893 年
徳富猪一郎『勝海舟伝』改造社、1932 年
鳥谷部春汀『明治人物評論』博文館、1900 年
下野新聞社『予は下野の百姓なり』下野新聞社、2008 年
山口孤剣『明治百傑伝』洛陽堂、1911 年
由井正臣『田中正造』岩波新書、1984 年

新聞

『毎日新聞』

『日本』

年鑑・目録

福沢諭吉協会『福沢諭吉年鑑』慶應義塾大学出版会 1974～2012 年

品川力編『内村鑑三研究文献目録（増補版）』荒竹出版 昭和 52 年

日本語研究文献

麻生義輝『近世日本哲学史：幕末から明治維新の啓蒙思想』書肆心水、2008 年

赤尾幟一「田中正造と赤尾塾」『史談』6 号、安蘇史談会編、1990 年

赤野孝次「福沢諭吉像の研究史的変遷」『史苑』第 62 号、2002 年

安在邦夫『立憲改進黨の活動と思想』校倉書房、1992 年

安西敏三『福沢諭吉と西欧思想—自然法・功利主義・進化論』名古屋大学出版会、1995 年

安西敏三『福沢諭吉と自由主義—個人・自治・国体』慶應義塾大学出版会、2007 年

安食文雄「村落共同体と田中正造」『龍谷史学』78 号、1980 年

雨宮義人「田中正造に於ける宗教者の形成」『歴史教育』(2)、1955 年 2 月

アルバート・M. クレイグ（足立康、梅津順一訳）『文明と啓蒙：初期福澤諭吉の思想』慶應義塾大学出版会、2009 年

アーノルド・トインビー（桑原武夫[ほか]訳）『図説歴史の研究』学習研究社、1975 年

飯田鼎『福澤諭吉研究：福澤諭吉と幕末維新の群像』『飯田鼎著作集・5』御茶の水書房、2001 年

飯田鼎『福澤諭吉と自由民権運動：自由民権運動と脱亜論』『飯田鼎著作集・6』御茶の水書房、2003 年

飯田鼎『幕末・明治の士魂：啓蒙と抵抗の思想的系譜』『飯田鼎著作集・7』御茶の水書房、2005 年

板倉卓造「学問のすすめと Wayland' s moral Science」『三田政治学会誌』第

9号、1934年

井田輝敏「日本近代化の使徒：福澤諭吉」『近代日本研究』2号、1985年

井田輝敏『近代日本の思想構造：諭吉・八束・一輝』木鐸社、1976年

家永三郎「福澤諭吉の人と思想」『福澤諭吉』『現代日本思想大系2』筑摩書房、1963年

家永三郎『近代思想史論』『家永三郎集・4』岩波書店、1998年

池田弥三郎「勝海舟の周囲」『勝海舟全集・12』、勁草書房、1971年

石井録郎『小中村史蹟』私家版、1923年

石塚恵子「福澤諭吉の道德論」『史論』19号、1968年

井田輝敏「日本近代化の使徒：福澤諭吉」『近代日本研究』第2号、1985年

伊藤正雄『福澤諭吉論考』吉川弘文館、1969年

伊藤正雄『資料集成 明治人の観た福澤諭吉』慶応通信、1970年

伊藤正雄「『瘠我慢の説』私説」『神戸女子大学紀要』第4号、1975年

伊藤正雄『福澤諭吉：警世の文学精神』、春秋社、1979年

巖本善治編『新訂海舟座談』岩波文庫、1983年

色川大吉『色川大吉著作集』筑摩書房、1996年

色川大吉「自由民権運動と田中正造」『田中正造とその時代』第3号、1982年

奥谷松治編『明治時代の消費組合史料集』産業組合中央会、1936年

内田魯庵『内田魯庵全集・4』ゆまに書房、1985年

内田魯庵『社会百面相』『内田魯庵全集・11』ゆまに書房、1981年

内田繁隆『日本政治思想研究』南郊社、1938年

植手通有『日本近代思想の形成』岩波書店、1974年

植手通有『明治思想における人間と国家』『植手通有集・1』あっぷる出版社、2015年5月

植手通有「内村鑑三と国民道德の観念」『植手通有集・2』あっぷる出版社、

2015年6月

エルンスト・トレルチ（小林謙一訳）『近代精神の本質』『トレルチ著作集・10』ヨルダン社、1981年

大塚桂「日本における多元的国家論の受容過程」『駒澤大学法学部研究紀要』(57)、1999年

大原慧『幸徳秋水の思想と大逆事件』青木書店、1977年

大原慧『片山潜の思想と大逆事件』論創社、1995年

- 『大久保利通関係文書・3』 マツノ書店、2008年
- 小田実「福沢諭吉—改革と抵抗の精神の所在」『小田実評論撰・1』筑摩書房、2000年
- 大久保利謙『明治維新の人物像』『大久保利謙歴史著作集・8』吉川弘文館、1989年
- 大橋博「日本地主制研究〔序説〕(上)」『農業総合研究』第27巻(3)、1973年
- 大竹庸悦『内村鑑三と田中正造』流通経済大学出版社、2002年
- 岡野幸江「木下尚江の島田三郎論」『初期社会主義研究』第2号、1987年
- 香内三郎「いわゆる公害報道の歴史—足尾鉍毒事件の一側面—」『新聞学評論』第20号、1971年
- 川辺真蔵『報道の先駆者: 羯南と蘇峰』三省堂、1943年1月
- 片子沢千代松「島田三郎」『三代言論人集・4』時事通信社、1963年
- 片山慶隆「陸羯南研究の現状と課題: 対外論・立憲主義・ナショナリズム」『一橋法学』6号、2007年
- 鹿野政直「近年の田中正造研究とその意味」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』3号、1980年
- 鹿野政直「福沢諭吉—西欧文明の推進者」『新版 日本の思想家(上)』朝日新聞社、1975年
- 鹿野政直「ナショナリストたちの肖像」『日本の名著・37』中央公論社、昭和46年
- 勝部真長『勝海舟』PHP研究所、2009年
- 勝部真長「勝海舟と福沢諭吉—「瘠我慢の説」をめぐって」『中央公論』第86号、1971年4月
- 苅部直「福沢諭吉の「怨望」論」『歴史という皮膚』岩波書店、2011年3月
- 苅部直[ほか]編『日本思想史講座4—近代』ぺりかん社、2013年
- カント『カント全集・3』理想社、1965年
- カント(有福孝岳訳)『純粹理性批判上』『カント全集・4』岩波書店、2001年
- カント(福田喜一訳)『世界市民的見地における普遍史試論』『カント全集14 歴史哲学論集』岩波書店、2000年
- 近代日本研究会『近代日本研究の検討と課題』山川出版社、1988年

- 栗原尚弥「田中正造と陽明学」『田中正造の世界』3号、1985年5月
- 桑原武夫編『中江兆民の研究』岩波書店、1966年
- 黒川貢三郎「二つの社会主義論—片山潜と幸徳秋水の初期社会主義論を中心に」『政経研究』第41巻第4号、2005年。
- 小川原正道『福沢諭吉の政治思想』慶應義塾大学出版会、2012年
- 小川原正道『明治の政治家と信仰—クリスチャン民権家の肖像』吉川弘文館、2013年
- 工藤英一「田中正造論—社会思想史的一試論—」『経済と歴史』（明治学院大学経済学会編）、1961年
- 工藤英一『近代日本社会思想史研究』教文館、1989年
- 国家学会編『明治憲政経済史論：国家学会創立満三十年記念』国家学会、大正8年
- 小山文雄『陸羯南：「国民」の創出』みすず書房、1990年
- 小泉信三「英訳「福翁自伝」の序」『小泉信三全集・13』文芸春秋、1968年
- 幸徳秋水『兆民先生、兆民先生行状記』岩波書店、1960年
- 小松茂夫、田中浩編『日本の国家思想』青木書店、1980年
- 小松裕『田中正造—二一世紀への思想人』筑摩書房、1997年
- 小松裕『田中正造の近代』現代企画室、2001年
- 小松裕、金泰昌編『田中正造—生涯を公共に献げた行動する思想人』東京大学出版会、2010年
- 小西徳應「「予は下野の百姓なり」考—「百姓」田中正造の自治観の変遷—」『田中正造の世界』7号
- 小林瑞乃『中江兆民の国家構想—資本主義化と民衆・アジア』明石書店、2008年
- 薄田泣菫『艸木虫魚』岩波書店、1998年
- 砂川幸雄の『直訴は必要だったか—足尾鉍毒事件の真実』勉誠出版、2004年
- 鈴木範久『内村鑑三とその時代—志賀重昂との比較』日本基督教団出版局、1975年11月
- 鈴木範久『内村鑑三』岩波書店、1984年
- 佐藤裕史「田中正造における政治と宗教」『法学』（東北大学法学研究科）61号、1997年
- 佐藤一郎「豊前・豊後および大阪の学問と福沢家」『近代日本研究』第2号、

1985 年

齊藤文恵「鉷毒とたたかった義人—田中正造」『歴史評論』37号、1952年
坂井雄吉「「国民論派」の使命—陸羯南の初期政論をめぐって—(1~4)」『大東法学』46.47.48.50号、2005~2006年

坂本多加雄『市場・道徳・秩序』創文社、1991年

坂野潤治『大系日本の歴史(13)・近代日本の出発』小学館、1989年

塩田庄兵衛『幸徳秋水』新日本出版社、1993年

信夫清三郎『日本政治史』南窓社、1976~1982年

澁谷浩『近代思想史における内村鑑三—政治・民族・無教会論』新地書房、

1988年

清水靖久「木下尚江にとっての田中正造」、『法政研究』57号、1991年

清水靖久『野生の信徒・木下尚江』九州大学出版社、2002年

シュンペーター(中山伊知郎・東畑精一訳)『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社、1995年

隅谷三喜男「内村鑑三と現代—座標軸をもつ思想」『世界』1981年1月号

隅谷三喜男『隅谷三喜男著作集・8』岩波書店、2003年

関口すみ子『国民道徳とジェンダー:福沢諭吉・井上哲次郎・和辻哲郎』東京大学出版会、2007年

鷲見洋一・前田富士男・柏木麻里編集、『世紀をつらぬく福沢諭吉—没後100年記念—』慶應義塾出版社、2001年

住田良仁「田中正造考(1~4)」『北海道東海大学紀要』第5.7.10.12号、1992、1994、1997、1999年

住谷悦治「明治キリスト教徒の社会主義思想—島田三郎の社会主義論について—」『同志社大学経済学論叢』12号、1962年11月

住谷悦治「デモクラシー譯字考」『同志社大学経済学論叢』第1巻第4号、1950年

全国教育者大集会編『帝国六大教育家:附名家叢談』博文館、1907年

武田晃二「島田三郎の「普通教育」論—改正教育令制定前後の文部省普通教育政策に関する一考察—」『岩手大学教育学部研究年報』第51巻第1号、1991年

武田清子「福沢諭吉の人間観」『国際基督教大学学報. I-A, 教育研究』5号、1958年

- 武田清子『土着と背教』新地出版、1967年
- 竹中正夫「田中正造の聖書観」『キリスト教社会問題研究』37号、1989年3月
- 田村紀雄『田中正造をめぐる言論思想：足尾鉍毒問題の情報化プロセス』社会評論社、1998年
- 田村紀雄「足尾銅山鉍毒事件解説」（神岡浪子編『資料 近代日本の公害』所収）新人物往来社、1971年
- 田村紀雄「農民運動とコミュニケーション（上）」『東京大学新聞研究所紀要』20号、1971年
- 田村紀雄『渡良瀬の思想史：農民運動の原型と展開』風媒社、1977年
- 田村紀雄編『私にとっての田中正造』総合労働研究所、1987年
- 田村秀明「正造の名主就任—安政六年「十九歳」説の論拠」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』8号
- 高橋昌郎『島田三郎—日本政界における人道主義者の生涯』基督教史学会、1954年
- 田中浩編『近代日本のジャーナリスト』御茶の水書房、1987年
- 田畑忍「福沢諭吉の政治思想」『学問と大学』東京：白揚社、1941年
- 千種義人『福沢諭吉の社会思想—その現代的意義—』同文館出版、1993年
- デーヴィド・ビーサム（住谷一彦、小林純共訳）『マックス・ヴェーバーと近代政治理論』未来社、1988年
- 遠山茂樹「福沢諭吉の啓蒙主義と陸羯南の歴史主義」『陸羯南集』『近代日本思想大系・4』筑摩書房、1987年
- 遠山茂樹『日本近代史論』『遠山茂樹著作集・4』岩波書店、1992年
- 遠山茂樹『明治の思想とナショナリズム』『遠山茂樹著作集・5』岩波書店、1992年
- 徳富猪一郎『好書品題』『蘇峰叢書・4』民友社、1928年
- 道家弘一郎『内村鑑三論』沖積舎、1992年
- 富田正文「福沢諭吉と勝海舟—『瘠せ我慢の説』の背景—」『別冊歴史手帖』、1973年
- 富田正文『考証福澤諭吉』（上・下）岩波書店、1992年
- 富永健一『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫、1990年
- 富永健一『近代化の理論：近代化における西洋と東洋』講談社、1996年

- 富永健一「近代化理論」の今日的課題—非西洋・後発社会発展の理論を求めて」『思想』730号、1985年4月
- 富永健一『思想としての社会学：産業主義から社会システム理論まで』新曜社、2008年
- 土肥昭夫『内村鑑三 人と思想シリーズ』日本基督教団出版部、1964年
- 東海林吉郎『歴史よ 人民のために歩め——田中正造の思想と行動(1)』太平出版社、1974年
- 東海林吉郎『共同体原理と国家構想—田中正造の思想と行動2』太平出版社、1977年
- 東海林吉郎「正造の土地売買「三千元」の儲に疑義あり」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』8号、1989年
- 東海林吉郎「田中正造思想の現代性」『救現』創刊号、1986年
- トーマス・マン『ドイツとドイツ人：他五篇：講演集』岩波文庫、1990年
- トクヴィル（小山勉訳）『旧体制と大革命』ちくま学芸文庫、1998年
- 内閣官報局『衆議院議事速記録』1890～1947年
- 中込道夫『田中正造と近代思想』現代評論社、1972年
- 中江篤介『中江兆民全集』（巻10～巻15）岩波書店、1983～1986年
- 中野正剛『明治民権史論』有倫堂、1913年
- 中村敏子「福沢諭吉における文明と家族—序説」『北大法学論集』巻40、1990年
- 中村敏子『福沢諭吉 文明と社会構想』創文社、2000年
- 長野精一『怒濤と深淵（田中正造・新井奥邃頌）』法律文化社、1981年
- 西尾隆志『現代政治と民主主義』晃洋書房、1999年
- 西田毅「大正期の日本思想と政治的多元論 political pluralism—中島重の場合」『同志社法学』63号、2011年
- 西村稔『福沢諭吉：国家理性と文明の道徳』名古屋大学出版会、2006年
- 丹羽邦男「天皇制国家の特質—福沢諭吉の「理性」と「人情」をめぐる」『神奈川大学評論』3号、1988年
- 丹羽泉「世俗化論の再検討—“聖なるもの”をめぐる闘争」『東京外国語大学論集』、第73号、2007年
- 日向康『田中正造を追う——その“生”と周辺』岩波書店、2003年
- 日向康「赤尾小四郎・清三郎・豊三」『田中正造の世界』1号、1984年5月

- 野村本之助「田中正造君と私」、『季刊明治文化研究』（第四輯）、明治文化研究会編、1934年
- 萩原延寿「「丁丑公論」「瘠我慢の説」を読む」『萩原延寿集・1』朝日新聞社、2007年
- 萩原延寿、江藤淳「時代の二つの顔—勝海舟と福沢諭吉(対談)」『萩原延寿集・2』朝日新聞社、2007年
- 朴忠錫、渡辺浩編『「文明」「開化」「平和」：日本と韓国』慶應義塾大学出版会、2006年
- 橋川文三「福沢諭吉の中国文明論」『橋川文三著作集・7』筑摩書房、1986年
- 長谷川如是閑『ある心の自叙伝』講談社、1984年
- 花崎皋平「田中正造の思想（上）」『世界』460号、1984年3月
- 花崎皋平「神と自然—晩年田中正造の思想—」『救現』3号、1990年
- 林茂[ほか]「田中正造—足尾鉍毒事件をめぐる—」『世界』105号、1954年
- 林健太郎「ランケの人と学問」『世界の名著・続11』中央公論社、1972年
- 林竹二『田中正造—その生涯と思想』筑摩書房、1985年
- 浜井修『ウェーバーの社会哲学』東京大学出版会、1982年
- ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』岩波文庫、1993年
- J. ハーバーマス（三島憲一[ほか]訳）『近代の哲学的ディスクール』岩波書店、1990年
- J. ハーバーマス（三島憲一編訳）『近代：未完のプロジェクト』岩波書店、2000年
- H. A・サイモン（佐々木恒男、吉原正彦訳）『意思決定と合理性』文真堂、1987年
- ハイエク（西山千明訳）『隷属への道』春秋社、1992年
- ハンナ・アレント（志水速雄訳）『歴史の意味—過去と未来の間に』合同出版、1970年
- 樋口雄彦『旧幕臣の明治維新：沼津兵学校とその群像』吉川弘文館、2005年
- ピーター・バーク（佐藤公彦訳）『歴史学と社会理論』慶應義塾大学出版会、2006年
- 布川了[ほか]「田中正造研究の現状と課題」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』5号、1982年
- 布川了「田中正造“政治への発心”の虚・実」『田中正造と足尾鉍毒事件研究』、

11号、1994年

福井淳「嚶鳴社員官吏と「改正教育令」—島田三郎を中心にして」『歴史学研究』535号、1984年11月

福吉勝男『福沢諭吉と多元的「市民社会」論：女性・家族・「人間交際」』世界思想社、2013年9月

フレッド・G. ノートヘルファー『幸徳秋水 日本の急進主義者の肖像』福村出版、1980年

保谷六郎「〈論説〉島田三郎と社会政策」『松阪大学松阪政経研究』7号、1989年

牧野雅彦『責任倫理の系譜学—ウェーバーにおける政治と学問』日本評論社、2000年

牧原憲夫、「田中正造—被治者と治者のはざまに」『感性の近代』岩波書店、2002年

本田逸夫『国民・自由・憲政—陸羯南の政治思想』木鐸社、1994年

ホブズボーム（安川悦子、水田洋訳）『市民革命と産業革命』岩波書店、1968年

ヘーゲル（真下信一、宮本十蔵訳）『小論理学』、『ヘーゲル全集・1』岩波書店、1996年

ヘーゲル（金子武蔵訳）『精神の現象学（上）』、『ヘーゲル全集・4』岩波書店、1971年

ヘーゲル（上妻精[ほか]訳）『法の哲学』、『ヘーゲル全集・9』岩波書店、2000年

ヘーゲル（武市健人訳）『哲学史』、『ヘーゲル全集・14』岩波書店、1974年。

ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義』岩波文庫、1994年

ヘーゲル（河野正通訳）『ラッソン版歴史哲学緒論「増補版」』白揚社、1947年

ヘーゲル（金子武蔵訳）『ヘーゲル政治論文集（上）』岩波文庫、1967年

前澤敏「正造の読書遍歴」『田中正造全集・月報』2号、1977年10月

正宗白鳥「内村全集を読む」、「内村鑑三」『正宗白鳥全集・9』新潮社、1965年

松浦玲『勝海舟』筑摩書房、2010年

松浦玲『明治の海舟とアジア』岩波書店、1987年

- 松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』中央公論新社、2001年
- 松本三之介『近代日本の政治と人間—その思想史的考察』創文社、1966年
- 松本三之介『明治思想における伝統と近代』東京大学出版会、1996年
- 松沢弘陽「内村鑑三の歴史意識」(1)、(2)、(3) 北大法学論集 17. 18. 19号、1967年～1969年
- 松沢弘陽「近代日本と内村鑑三」『日本の名著・38』中央公論社、1971年
- 松沢弘陽『日本社会主義の思想』筑摩書房、1973年
- 松沢弘陽「田中正造と泰西文明」『田中正造全集』月報5、1977年
- 松沢弘陽「社会契約から文明史へ—福沢諭吉の初期国民国家形成構想・試論—」『北大法学論集』第40巻5.6号、1990年
- 松田宏一郎「福沢諭吉と「公」・「私」・「分」の再発見」『立教法学』第43号、1996年2月
- 松田宏一郎『江戸の知識から明治の政治へ』ペリかん社、2008年
- 松本英一『松本英一日記』『板倉町郷土資料』、1963年
- 眞鍋俊二「勝海舟と現代—勝海舟先生帰山一〇周年を前にして」『関西大学法学論集』第58号、2008年11月
- 丸山真男『丸山真男集』岩波書店、1995～1996年
- 丸山真男『丸山真男集・別集』岩波書店、2014～2015年
- 丸山真男『増補版—現代政治の思想と行動』未来社、1999年
- 丸山真男『丸山真男講義録』東京大学出版会、1998～2000年
- M. ウィリアム・スティーアール『もう一つの近代：側面からみた幕末明治』ペリかん社、1998年
- マルクス（横張誠訳）『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』『マルクス・コレクションⅢ』所収 筑摩書房、2005年
- マルクス（今村仁司訳）『資本論 第一巻（上）』筑摩書房、2005年
- マルクス（村岡晋一訳）「アルノルト・ルーゲへの手紙（1843年9月）」『マルクス・コレクションⅦ』筑摩書房、2005年
- マックス・ヴェーバー（富永祐治、立野保男訳）『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、1998年
- マックス・ヴェーバー（尾高邦雄訳）『職業としての学問』岩波書店、1936年。
- マックス・ウェーバー（恒藤恭校[ほか]訳）『社会科学方法論』岩波文庫、1954年

- マルクーゼ（榊田啓三郎[ほか]訳）『理性と革命：ヘーゲルと社会理論の興隆』岩波書店、1961年
- 真辺将之「足尾鉍毒事件と谷干城」『文人の眼（4）』里文出版、2002年
- マイネッケ（菊盛英夫、生松敬三訳）『近代史における国家理性の理念』、みすず書房、1960年
- マイネッケ（中山治一訳）『歴史的感覚と歴史の意味』創文社、1972年
- マンハイム（高橋徹、徳永恂訳）『イデオロギーとユートピア』、『世界の名著・56』中央公論社、1971年
- マンハイム（樺俊雄[ほか]訳）『知識社会学』『マンハイム全集・2』潮出版社、1975年
- 守本順一郎『日本思想史の課題と方法』新日本出版社、1974年
- 溝口雄三『中国の公と私』研文出版、1995年
- 溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989年
- 溝口雄三「方法としての『中国独自の近代』」『中国の発見—中国学方法論のパラダイム転換—』愛知大学国際中国学研究センター、2007年
- 溝口雄三、池田知久、小島毅『中国思想史』東京大学出版会、2007年
- 三浦叶『明治の漢学』汲古書院、1998年
- 三浦頭一郎「田中正造の原初体験」『白鷗法学』第20号、2002年
- 三浦頭一郎「福沢諭吉と足尾鉍毒事件」『白鷗法学』第22号、2003年
- 三宅雪嶺「「瘠せ我慢の説」を紹介す」『日本人』129号
- 三宅雪嶺「「瘠せ我慢の説」に就き」『日本人』131号
- 森長英三郎『足尾鉍毒事件』日本評論社、1982年
- 森有正「内村鑑三」『森有正全集・7—近代精神とキリスト教』筑摩書房、1979年
- 山岡桂二『日本近代思想史に於ける政治と人間』東峰出版、1964年
- 山岡桂二「「島田三郎伝」と島田三郎」『木下尚江著作集・15』明治文献、1973年
- 山岡桂二「島田沼南における政治意識について」『歴史研究』（大阪学芸大学歴史研究室）、1963年11月
- 山口隆夫「人間平等—福沢の夢ウェイランドの夢—「道德科学要論」と「学問のすすめ」比較言語文化研究」『東京工業大学人文論叢』第20巻、1994年
- 山本武利『公害報道の原点—田中正造と世論形成』御茶の水書房、1986年

- 山本武利 『新聞記者の誕生：日本のメディアをつくった人びと』 新曜社、1990年
- 柳田泉 『日本革命の予言者木下尚江』 春秋社、1961年
- 米原謙 「福沢諭吉における文明論の展開」 『下関市立大学論集』 第27巻、1983年
- 矢内原忠雄 『内村鑑三とともに』 東京大学出版会、1962年
- 由井正臣 「田中正造における明治憲法観の展開」 遠山茂樹編 『近代天皇制の成立』 岩波書店、1987年
- 吉田浩 「マックス・ウェーバーにおける「形式合理性」と「実質合理性」との二律背反関係について—ウェーバー合理化論の批判的検討—」 『徳島大学社会科学研究所』、第18号
- 湯本豪一編 『図説明治人物事典』 紀伊國屋書店、2000年
- 吉田義次 『国土陸羯南』 昭和刊行会、昭和19年
- 吉野作造 『吉野作造選集・12』 岩波書店、1995年
- 吉野作造 「吉野作造講義録（五・完）」 『国家学会雑誌』 第122号、2009年
- 歴史学研究会編 『講座日本史5 明治維新』 東京大学出版会、1970年
- 李慶愛 『内村鑑三のキリスト教思想—贖罪論と終末論を中心として』 九州大学出版会、2003年
- リオタール（小林康夫訳） 『ポスト・モダンの条件：知・社会・言語ゲーム』 星雲社、1986年
- レオ・シュトラウス（石崎嘉彦訳） 『政治哲学とは何か：レオ・シュトラウスの政治哲学論集』 昭和堂、1992年
- 蠟山正道 『政治学—昭和十二年度東大講義』 東京プリント刊行会刊
- 和田洋一 「田中正造と私の偏見」 『本のひろば』、1977年8月
- 渡辺隆喜 「大同団結運動と地方政情」 『駿台史学』 1980年
- 渡辺隆喜 「鉍毒事件と地方政治」 『明治大学人文科学研究所紀要』 別冊2、1982年
- 渡辺隆喜 『明治国家形成と地方自治』 吉川弘文館、2001年
- 渡辺隆喜、「鉍毒事件と地方政治」 『明治大学人文科学研究所紀要』、1982年
- 渡辺浩 『近世日本社会と宋学』 東京大学出版会、1985年
- 渡辺浩 『日本政治思想史：十七～十九世紀』 東京大学出版会、2010年

外国語研究文献（A～Z 順に並べる）

Coser, Lewis A., and Robert King Merton. *Masters of sociological thought: Ideas in historical and social context*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1971.

Drury, Shadia B. *Alexandre Kojève: the roots of postmodern politics*. London: Macmillan, 1994.

Hayden, White. *Metahistory: the historical imagination in nineteenth-century Europe*. Baltimore and London: Johns Hopkins University, 1973.

Iggers, Georg G., and Konrad von Moltke. *Leopold von Ranke. The theory and practice of history*. New translations by Wilma A. Iggers and Konrad von Moltke. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1973.

Maurizio Passerin d'Entrèves, and Seyla Benhabib. *Habermas and the unfinished project of modernity: Critical essays on the philosophical discourse of modernity*. MIT Press, 1997.

Michael E. Latham. *Modernization as Ideology: American Social Science and "Nation Building" in the Kennedy Era*. University of North Carolina Press, 2000.

Rolf Wiggershaus. *The Frankfurt School: Its History, Theories, and Political Significance*. Translated by Michael Robertson. Cambridge, Mass. MIT Press, 1994.

Unger, Roberto Mangabeira. *The self awakened: Pragmatism unbound*. Harvard University Press, 2007.

論文の内容の要旨

論文題目 明治時代の知識人と足尾鉍毒事件—「近代性」問題への思想史的接近

氏名 商 兆琦

本論文は、二つの課題を提起する。その一つは、日本近代史の流動的・全体的場面から、田中正造の歴史像及び思想像を実証的に明らかにすることである。もう一つは、足尾鉍毒事件をめぐる明治知識人の意見の対立、衝突及び交錯という歴史のコンテクストを「再構築する」ことを通じて、彼らの思想世界に横たわる根本的な動機を比較分析し、それぞれの思想像を解剖して再構成することである。

その目的は、従来の田中正造論と鉍毒論の相対化を促す一方、さまざまな価値観が混在し、関連し、また相互に拮抗しつつある明治思想史の一断面を眺めることにある。それと同時に、明治知識人たちが鉍毒事件に直面して生じた「精神的な反応」を析出することにより、彼らが如何にして「近代」を受けとめ、またその「近代」に内在する様々な欠陥をどのように暴露して克服しようとしたのかを解明したい。（以上は序章）

この二つの課題を「田中正造研究」と「明治知識人研究」という二部にわけて検討する。

第1部では、これまで検討されてこなかった明治時代における田中正造の人間像と思想像を、実証的に明らかにしようとする。

第一章「「生き返らせる」田中正造研究」においては、これまでの田中正造論が、歴史の文脈への考慮なしに、あまりにも研究者たちが生きる時代風潮、言い換えれば現実的な観点から取り扱われてきたという問題を指摘する。そして、田中正造の思想構造＝「内側」と正造が生きた社会の構造＝「外側」を一つの全体として捉え、「内側」と「外側」との弁証的・連動的な関係を捉えることを通じて、「神格化」されてきた正造像を見直す必要があることを指摘する。

第二章「「正造研究」以前の正造像」においては、時代色の投影と研究者の「思想共鳴」による感情移入などの問題を念頭に、「正造研究」ブームが出現する前の田中正造像について、考察を行う。さらに、正造の自己自身の認識を

検討し、より安定的な田中正造像を浮き彫りにする作業を試みる。その結果、田中正造は到底「利害計算・分配・調和」という現代的な概念をもつ理性の政治家ではなく、一種の「精神家」の存在であり、また「義人」、「志士」の志向が否定できない「古型」の人物であることを指摘する。

第三章「田中正造と下野(しもつけ)」においては、田中正造の「下野の百姓」という自己表現を手掛かりにして、彼の財産、衣服、経済状況について検討を行う。また、田中正造の社会的なネットワークに対する検討を通して、正造にとっての「下野」の意味を解明する。正造の血縁、地縁と精神縁の共同体は、いずれも「下野」と深く関わり、下野から物心両面における大きな援助を受けていたと同時に、地元の名望家、「下野の代弁人」という性格を強くもっていたことを明らかにする。

続く第四章「田中正造の「無学」をめぐる一考察—その思想像の一側面」においては、田中正造の勉強、学習環境、学問状態を通して、「無学」という言葉の意味を解明する。儒教思想が正造に与えた影響を初めに論じる。正造は社会体験と社会実践を重視し、知識を現実生かす考えが強い「実学」の風格と「社会大学」に通って学ぶべきだという「行動主義」性を持っていることを解明する。儒教の義理と精神を重視し、訓詁などの学問方法を批判している点で、正造の学問は濃厚な陽明学的色彩を示している。正造は、儒学によって形成された文化的基礎を持ち、それは、民権思想やキリスト教などを受け入れた後も、思想の枠組みとして働いているように見える。

第2部では、「明治思想界にとっての鉅毒事件」という問題意識の下、勝海舟、福沢諭吉、島田三郎、陸羯南、内村鑑三、幸徳秋水ら明治知識人を取り上げて、鉅毒事件をめぐる彼らの思想言説を解明すると共に、その間に生じた対立、そして対立の根本原因を明らかにしたい。

第五章「「情」と「智」の相剋：勝海舟と福沢諭吉」では、まず、勝と福沢の人物像を考察し、「英雄」としての勝及び「明治文明の恩人」としての福沢を見出す。その後、鉅毒事件をめぐる勝と福沢の意見を比較分析し、その相違性を追究し、彼らの根本的な動機と思想構造を解剖する作業を試みる。政治家としての勝の問題意識が、「どのように民衆を治めるか」であって、その解決策を「情」の作用に求めることと異なり、学者としての福沢の問題意識は、「どのように新しい民心を作り出すか」ということであり、思考の中心には常に「智」が据えられた。それゆえ、勝においては、政治と道徳が常に密接し、「正心誠

意」によって個人のエゴイズムを出来る限り解消することを通じて「人心の折り合い」を実現することが最優先の課題であった。一方、福沢は、「疑の世界に真理多し」を唱える立場から、「政治と道德との分離」を支持し、個人のエゴイズムを解消するのではなく、むしろそれを積極的に転換することによって、社会秩序の成立と維持を求めようとした。

第六章「「社会」と「国家」のはざままで：島田三郎と陸羯南」では、まず島田と陸の使命感と人物像を確認する。「平民社会」の成立に尽力し、その「立憲政治家」の使命を果たそうとする島田は、性格と能力の制限があるため、結局「小き聖人君子」に過ぎなかった。一方、「国民の独立」と「国民の自由」に奉仕するという使命感に突き動かされ陸は、民族精神の発揚と泰西文明の摂取との間に橋を架けようとした「独立的記者」であった。

島田と陸は、「優勝劣敗」や「自由競争」などの原則の上に築かれている近代社会に積極的な反省を与え、それを乗り越えようとした。島田は、主として社会手段を利用し、鉅毒問題を解決することを強調した。陸は、政治手段を利用してこの問題の解決を唱えた。彼らはいずれも藩閥政府が主導した文明開化の皮相と欠陥を批判し、それは「上層社会」の文明化に過ぎないと論じ、「下層社会」の改革の必要性を盛んに唱えた。つまり、人民の勢力の発達があれば、社会的な規模の文明化の達成は、決して望むべきことではない。ただし、陸において、人民は「国民」を意味するが、島田においては、人民は「平民」を意味した。二人とも、「有機社会」の立場に立って、「文明社会」における「人情」や「道德」の意味を積極的に強調し、道德が腐敗した社会においては、「本当の自由」がどうしても実現されないということを力説していた。しかし、島田は、「多数者の多福を計らんとす」という原理を一貫して提唱し、「社会改良」の路線及び「中正」の立場に固執した。陸は、福沢流の功利主義の限界を鋭く見つめ、「各人の能力の発達」、「国家の統一」および「社会の博愛」という文明政治を目指して「国家社会主義」を唱えていた。

第七章「「近代」への反逆：内村鑑三と幸徳秋水」では、内村と幸徳の鉅毒論を概観すると同時に、二人の人物像と思想像の解明を試みる。幸徳は、社会主義による「外」向きな「制度の改造」を通じて近代日本の行き詰まりを打開することを唱えていた。これに対して、内村は、国民の精神を更新しないかぎり、真の文明がどうしても獲得されないということを念頭に置き、「内」向きな「人心の改造」の必要性を訴えていた。

内村によれば、鉍毒問題の本質は「山から出る毒ではなくして、人の心におき出づる毒」である。それゆえ、鉍毒問題を根底より治めるには、人心を改良しなければならない。内村によれば、道徳が国家のすべての成員を結合させる紐帯であり、一つの共同体を形成し維持するには普遍的な道徳意識が前提となる。ところが、明治維新は個人主義や拝金主義に走り、多くの「社会の敗徳」を生み出した。内村は、「政治の目的は善を為すに易くして悪を為すに難き社会を作るにあり」と考え、真の神への信仰の再建によって真の社会を建設することを提唱していた。

一方、幸徳によれば、制度の規制（＝外部規範）と比べて、道徳的規制（＝内部規範）が常に無力であり、「悪事」を抑制して「善事」を促進する制度がなければ、一つの完全な社会はあり得ないのである。幸徳は明治憲法体制のみならず議会制民主主義自体に対する疑念を抱え、それを乗り越える方法を模索した。幸徳によれば、「社会問題」を根本的に解決するためには、生産手段の私有に基づく資本主義制度を根底から改め、社会主義のシステムへと移行させなければならない。ところが、この目標の実現に向けて、幸徳が打ち出した路線が、極めて独特なものである。幸徳は、国家の改革の志向を天皇に托し、「臣民の請願の権力」を提唱し、田中正造の天皇直訴に積極的に協力した。また、日本の官尊民卑の縦型の権力構造及び議会政治の腐敗と無能を打ち破るために、直接投票及び直接発議権などの参政権の導入を訴えた。さらに、社会改革を実現するには、「志士仁人」の奮起を訴えた。

最後に終章「近代性」問題と明治知識人」では、それぞれの知識人の思惟の諸体系を互いに関連（並立、連続、継続）させることによって明治日本における「近代性の運命」を明らかにしようとする。その結果、明治思想世界の中に反映されていった「近代性」の「生起と形成」、「継承と調整」、「挫折と挑戦」という運命、そして伝統思想と導入された西洋思想とが複雑に交錯する歴史場面をある程度解明できることを述べる。さらに、正造の思想には、先行研究で指摘されてきた「進み位相」とともに、「遅れ位相」も同時に存在することは否定できないと指摘する。このような二種類の正造の「位相」を同時に考慮することで、明治思想史における田中正造の位置づけを捉えることがはじめて可能になる。